東邦大学学術リポジトリ
Toho University Academic Repository

タイトル	東日本大震災小学生支援プログラムに参加する大学生における ジャーナル分析を通した「経験を通した学び」の効果の検討
別タイトル	A study of effect of an experiential learning method by examining journals written by university students who participate in Great East Japan Earthquake support program for elementary school students
作成者（著者）	中山, 恵一
公開者	東邦大学教員養成課程
発行日	2021.08.31
ISSN	24358290
掲載情報	東邦大学教職教育研究. 4. p.9-17.
資料種別	紀要論文
内容記述	実践論文
著者版フラグ	publisher
メタデータのＵＲＬ	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD81174301

東日本大震災小学生支援プログラムに参加する大学生における ジャーナル分析を通した「経験を通した学び」の効果の検討

A study of effect of an experiential learning method by examining journals written by university students who participate in Great East Japan Earthquake support program for elementary school students

中山　恵一
Keiichi NAKAYAMA

１．はじめに

東日本大震災では、2021年3月1日現在で震災関連死を含めず、18,425人（警察庁）が亡くなったか、ゆくえが分からなくなっている。本論を始めるに当たり、亡くなられた方に哀悼の意を表するとともに、被害に遭われた方々、いまだに生活を取り戻すことができていない方々にお見舞いを申し上げる。

２．目的

東日本大震災で大きな被害に遭った宮城県亘理郡山元町の小学校において、筆者は2012年3月より「笑顔になろうプロジェクト（以下、本企画）」と称し、大学生をスタッフとして、小学生に対する学習支援とレクリエーションのプログラムを実施している。本企画の第一義的な目的は、被災した小学生に少しでも楽しい時間を過ごしてもらうことである。しかし筆者が主目的と同様に重要視しているのは、参加する大学生が経験を通じ、気づきや学びを得て、日常生活へ持ち帰って活かすことができる学びの機会とすることである。

そこで本論では、大学生が本企画に参加することで、何かしらの学びを得ることができるのかを分析することを目的とする。分析には、大学生が毎日の活動記録として、また何か得たのかを振り返るためのツールとして現地での活動中に毎夜書いているジャーナルを用いた。

３．「笑顔になろうプロジェクト」について

3.1「笑顔になろうプロジェクト」のはじまり

筆者が担当していた大学の講義で「実現可能なボランティアの企画書」というレポートを課した。提出物の一つに「被災した地域の小学生が、一瞬でもつらいことを忘れて、楽しい時間を過ごして欲しい」という企画書があった。この大学生たちの想いと、当時子どもに対する精神的支援のニーズがあった山元町とを結ぶ可能性を考え、学区に山と沿岸部を持つ小学校と打ち合わせをし、実現することとなった。内容は、学習支援とレクリエーションであった。

児童を「笑顔にする」のではなく、大学生が児童と全力であそび、真剣に向かい合うことで児童が自然と「笑顔になる」ことを期待して「笑顔になろうプロジェクト」というタイトルにした。本企画は一般社団法人くまプ

東邦大学教員養成課程　非常勤講師

ロジェクトが主催し、スタッフとして参加する大学生が、内容をすべて立案し、進行を考え、実行している。

3.2 「笑顔になろうプロジェクト」の目的

本企画を開始した当時の目的は、「津波被害に遭った児童が、笑顔になって欲しい」というものであった。しかし、地域の方々との交流を重ねていく中で、徐々に「笑顔になって欲しいのは、児童だけではなく地域の方々も」という考えが生まれてきた。加えて主催者側としては、本企画に関わる大学生にも笑顔になって欲しいと願っている。そのため現在は「児童も、地域住民も、大学生も笑顔になるプログラム」を目的としている。

「なぜ、直接的に津波被害を受けていない児童をいまだに対象にしているのか」と問われることがある。確かに今の児童は直接津波被害を受けているわけではないが、家を津波で失って移転をせざるを得なかった家庭で育っている子どもがいる。そのような家族は、もともとは広い土地、広い家に住んでいた。しかし津波で家を失い、町に危険区域に指定されたために同じ場所に新築することが許されず、新しく造成され、区画整理された住宅街に移住せざるを得なかった。狭い土地、狭い家、以前のコミュニティーはなくなり、子どもの親、祖父母にとっては高いストレスの住環境である。そのような家庭環境は、子どもにとっても健全な環境とは言い難い。宮城県沿岸部の学校における不登校の児童生徒数が他県に比べて高い傾向にあることと、そのような住環境とは、何らかの関係があるのではないか、とのことである（山元町教育委員会）。現在の笑顔になろうプロジェクトが、いまだに児童を対象に実施しているのは、東日本大震災の間接的な困難さを受けている児童が存在しているからである。

3.3　開催実績

2012年3月に第一回目を児童49名、スタッフ18名で4日間開催した後、2015年8月からは2校で開催することになった。2019年8月までに14回開催し、延べ参加児童数693名、延べ参加大学生スタッフ数267名である。カナダの高校や市から資金、YouTubeにアップされているビデオレター、物品などの支援を頂いての開催の回もあった。山元町の広報紙や、有力地方新聞に2度取り上げて頂いた。

2019年8月を最後に、新型コロナウィルス感染拡大防止の観点から、本企画は開催を中断している。

3.4　実施内容

3.4.1　宿泊

宿泊は、お寺や集落の公民館をお借りしてきた。そこで自炊し、大広間で寝泊りしている。また公民館を拠点に、地域住民の方々との交流会をさせて頂き、震災当時の話を伺ったり、活動を共にさせて頂いたりしている。

3.4.2　移動

移動は、バス、バン、トレーラーなど、その回の人数、予算、荷物量などによって使い分けている。運転は筆者及び法人関係者が行う。貸切バスは料金が高く、また細かな移動に対応できないので使っていない。

3.4.3　振り返り

振り返りは、その日、何が起きたのか、その時、どのような対応をしたのか、どのような気持ちだったのか、それを翌日またはそれ以降、どう活かしていくのかを考えるために非常に重要なものである。話し合いの場を持つことがもっとも効果的であるが、小グループに分けてもある程度の時間は必要である。そこで本企画では、企画の準備時間の確保、及び大学生の休息時間の確保の観点から、本企画用に作成した記述式の振り返り（ジャーナル、本論末に収録）を採用し、その日の記録と振り返りのために一日の終わりに学生が

記入している。時間がある場合は、話し合いとジャーナルを併用している。

3.4.4　日程

1日目（移動、見学）

バスでの移動中も一つのアクティビティととらえ、事前ミーティングに参加できなかった初めて出会う大学生同士がこれからの日程を過ごすためのきっかけ作りの時間にしている。座席は意図的にバラバラにされ、近くの人と出されたテーマで話し合うことが求められる。山元町での共同生活では社会性が求められ、自分たちで主体的に動かなければならない。決まったことが変更になることもあるため、柔軟性が必要になる。

道中、福島第一原子力発電所事故の影響で、いまだにゲートで封鎖されている帰宅困難地域を筆者が説明しながら通過したり、東京電力関連施設や復興本社で東電職員との質疑応答をしたり、双葉町内を現地の方に案内して頂いたりする。今回の分析対象のジャーナルを書いた笑顔になろうプロジェクト実施回には、関連施設や復興本社を訪問していない。

2日目（見学、交流）

山元町内では津波被害に遭った沿岸部、震災遺構の小学校、幼稚園などを訪れたり、津波で破壊された乗用車を見て、実際に触ったりする。津波に押されてしまった家を間近で見たり、堤防に乗って押し寄せる波の振動を足の裏で実際に感じることで、3月11日の波を想像したりする時間を持ったりもしている。また、被害に遭われた住民の方と交流したり、震災がきっかけでご自身のお気持ちの曲を作って歌うことを始めた方をお招きし、ご披露頂くこともしている。福島県新地町のリンゴ園では風評被害に遭って、育てたリンゴを自ら粉砕廃棄せざるを得ず、廃園を考えた農園主から、直接お話を伺うこともする。

3日目～5日目（小学校企画）

小学校でのプログラム実施である。企画実施のためにミーティングし、準備をし、実行し、振り返り、そして次に向けて改めて打ち合わせをして、どのように児童と接すればよいのか、どのように企画を進めればよいかを考え、実践している。グループに配置した大学生同士、児童との関わり合い方の点検をし、さらなる向上を図ることができる。教材の作成、準備、指導法、レクリエーションの内容準備、物品作成など、児童との関わり方や企画力、実行力を学ぶ機会となる。

4. 分析方法

本論では、プログラム内容がほぼ同じ連続した直近の2回である2018年3月と2017年8月のジャーナルを分析した。なお、ジャーナルに書かれた内容については、匿名を条件に研究に用いられることの承諾を得ている。ジャーナルは、初日から5日目まである。それを筆者が読み、実際に経験することによって得た気づきや感情などに関する記述を抽出した。

5. 結果、考察

ジャーナルに記述されたものを先に述べた方法に沿って抽出し、それを大別すると、1）東日本大震災に関して、2）小学校でのプログラムに関して、及び3）自己、他者認知に分けることができる。各分類の中で、さらに細分化できるので、1分類ずつ記述されたものを細分類し、列挙する。

5.1　東日本大震災に関して

東日本大震災での被害については、報道や人から聞いたことで大学生は「知って」はいた。しかし被災した地域を訪れたり、被災された方から話を聴くことは初めての大学生がほとんどであった。そのため「本物に触れる」ことで得た気づきについて、ジャーナルで述べていた。以下で、それを①福島県内での気づき、②山元町内見学での気づき、③被災された方との関わりでの気づきとして列挙する。

5.1.1　福島県内での気づき

●（１日目）福島出身なので、原発のことはよく知っているつもりだったが、実際に見て、言葉が出なかった。

●（１日目）報道と現実には差がある。

●（１日目）帰還困難というが、それがどれだけ重い言葉なのか、今回の見学でよくわかった。

●（１日目）テレビや新聞で見聞きして分かっていたつもりだったが、何もわかっていなかった。

●（１日目）帰宅困難区域縮小になって、信号も動いていたが、人はいない。さみしくなった。

5.1.2　山元町見学での気づき

●（１日目）津波に飲み込まれる、という経験をした話を直接聞いた。なんともショッキングなことだった。

●（２日目）津波被害に遭った小学校を見学し、普段通っている小学校がこうもあっけなく流されることを考えると、あまりに恐ろしすぎた。

●（２日目）防波堤で波の強さを感じたり、高台で津波が来た高さまで登ったり、実際の津波を想像したらぞっとした。

●（２日目）自然災害を身近に感じることができた。

●（２日目）被災した地域を見て、被害の大きさを感じ、震災を考えるきっかけになった。

5.1.3　被災された方との関わり（山元町）

●（２日目）来る前に知人が「現地の人は気にせず生活している」と聞いていたが、今日、地元の人の話を聴き、まだまだそんなことはないことを知った。実際に来ないと分からないことだ。

●（２日目）被災された方の歌と話を聴き、建物の復興だけではなく、被災された方の心のケアもとても大切であると感じた。

●（３日目）地元の方が、震災当時の話を涙を浮かべながら直接語り掛けてくださったことは、心に響いた。

●（３日目）被災した方がどれだけ苦労していたか、知らなかった。

被災した地域の見学は1日目及び2日目に、被災された方をお招きするのは2日目及び3日目に実施した。必ず小学校でのプログラム前に実施することで、まず、我々がどういうところを訪れたのか、なぜそのようなところで笑顔になろうプロジェクトを実施する必要があるのかを考えるきっかけとしている。

福島県では、原発周辺の大熊町、双葉町の帰宅困難地域を見学した。3月11日のままの街並みを見ると、報道では伝えきれない空気感が伝わるようである。また山元町内見学でも、例えば「10mの津波」と言われても数字でしかないものが、実際に被害に遭ったものを見たり、被害に遭われた方から話を伺ったりすることで被害の大きさをイメージしやすくなる。そして、それがきっかけで災害を対岸の火事と考えず、自分の事として考えるようになった。

5.2　小学校でのプログラムに関連することからの気づき

大学生が①小学校でのプログラムから気づいたこと、及び②児童について学んだことを列挙する。また、小学校のプログラムで③うれしかったことに言及している箇所も抽出した。さらには、④「教育者」という視点で記述しているものも列挙する。

5.2.1　小学校でのプログラムでの気づき

●（３日目）グループでの話し合いで、全員参加させることは難しいと感じた。

●（３日目) 各メンバーが、それぞれよくしたい、という気持ちを持って意見を出していた。

●（３日目) 子どもをただグループに分けるのではなく、子どもの特性なども考慮してバランスよく組む必要があることを理解した。

●（４日目) クラスにそれぞれ色があり、対

応一つで、大きくクラスの雰囲気が変わることが分かった。

●（５日目) 報告することの大切さを学んだ。情報共有が大切。

３日目のミーティングでは、困難さがありつつも、その活発さを実感した様子がうかがえる。また、小学校でのプログラムに向けて、グループ分けをするとき、配慮しなければならない事柄、それをしないとどうなってしまうのか、非常に敏感な問題であることを実感として理解したようである。プログラム成功のためには他者との協力が必要であるとの内容が述べられていたが、これは他の大学生も述べていた。実際に経験したからこそ実感したことであろう。

5.2.2　児童について学んだこと

●（４日目）人に教える難しさを学んだ。

●（４日目）小さい子どもでも、想像以上の能力を持っている。

●（４日目）集中力が切れた子どもにどう対応するかを学んだ。

●（４日目）小学生だから、○○はできない、と決めつけることはとても良くないこと、と理解した。

●（５日目）子どもはささいなことでも記憶している。

●（５日目）児童は思っている以上に深く考えて行動している。

この項目については、まさに経験をしたからこそ気づいた児童の特性である。事前に配布していたしおりや勉強会で、児童はよく覚えているから「また来るからね」と簡単に約束をしてはいけない、と伝えていた。なぜなら、大学生は次回必ず山元に戻ってくることができるとは限らず、再訪できない場合、児童は「約束を守らなかった」を思うからである。ある大学生は「子どもは小さなこともよく覚えていて、『簡単に約束をしてはいけない』という意味が分かった」と述べていた。

5.2.3　うれしかったこと

●1年前に参加したが、子どもたちが覚えていてくれてうれしかった。

●最初はしゃべってくれなかった男の子も、次第にすすんで話してくれるようになった。

●昨日まで一緒にいた子が他の人について行っているのをみるのは、けっこう悔しかった。

●「一番楽しかったことは」という質問に、子どもは「会話」と書いていた。涙が出そうになるくらいうれしかった。

●やりがいを感じることができた。

●初参加で手紙をもらい、非常に驚いた。

企画を終え、非常に「気持ち」が入った様子がうかがえる内容が書かれている。それだけ真剣に、全力投球した結果であろうと推測できる。「悔しかった」というものを抽出したが、これは「うれしさ×（－１)」と考えた。強い「気持ちが入った」状態であるからこそのことで、裏を返せば「うれしさ」と考えたからである。この言葉は、他に自分自身がうれしい、と感じた事柄と同じ列に書かれていたものであることを付記しておく。

5.2.4 「教育者」としての視点

●（２日目）学校の先生が子どもに津波を見せないように動いた話※を聴き、先生という職業は生徒の命を守らなくてはならないことを実感した。

●（４日目）少しは教育者の気持ちを感じることができた。

●（４日目）人に教える難しさを学んだ。

小学生と関わることで、教育者としての魅力が高まったようである。事実、笑顔になろうプロジェクトがきっかけとなり、過去には小学校教諭の資格取得を目指す東邦大学教職課程の大学生がいたり、宮城県の教員採用試験を受験することを決めている者もいる。

※津波が襲った中浜小学校の屋上に避難した児童と教員を校舎の高さを大きく超えるであろう津波が沖から来たときのこ

とである。教員は覚悟を決め、最期の瞬間に怖い思いをさせないよう、津波を見せないために児童の前に立ちはだかったそうである。幸い強い引き波が、向かってくる津波を崩して高さが校舎より低くなったため、難を逃れ、中浜小学校に避難した方に犠牲者は出なかった。

5.3　自己、他者認知

笑顔になろうプロジェクト期間中、自分自身の態度や行動を振り返り、①課題とするものを挙げ、またそれが②どう変容したのかを記述していた。さらに、人との関わりについて記述していたものを③社会性として分類した。

5.3.1　自己課題

●（１日目）恥ずかしがらずに、自分の意見を述べる。

●（１日目）失敗することは怖いが、積極的に人と関わりにいって、成長したい。

●（１日目）何もしない時間がおおかった。無駄な時間をなくし、することを見つけるようにする。

●（２日目）被災した方から直接話を聴き、質問できる機会があったのに、勇気がでなかった。次は質問したい。（多数）

●（３日目）自分の良くなかったところを振り返り、改善できるようにする。

自己課題に関する記述は、企画開始直後に集中している。コミュニケーションに関することや、被災された方が我々のために歌を披露して下さったり、震災後の話をして下さった際、大学生が質問をすることができなかったことを反省しての記述が多かった。総じて、自らの積極性が不足していることについての記述であった。

5.3.2　自分自身の行動の変容

●（３日目）質疑応答の際、質問をすることができた。（多数）

●（３日目）あまり話していない人に発言を促すことができた。

●（３日目）自分の意見をはっきり伝えることができた。

●（５日目）とても消極的で主張する勇気がなかったけれど、今回、克服しようと反省会などで積極的に参加するように心がけた。少しだが、自分に自信をつけることができた。

●（５日目）失敗を恐れて受動的になりがちだったが、少し勇気を出して行動することで、良い結果が出ることが多かった。

期間前半の自己課題を受け、肯定的な行動の変容についての記述で目立った。特に多かったのが、被災された方が歌や話を披露してくださったときに質問できなかったが、翌日、お地蔵さん作りのために来てくださった被災された方のときには質問ができた、という記述が多くみられた。他にも「自分から発言をした」という記述がみられ、企画前半では、人との関わりにおいて「黙っていた」というものが、自分から発信するように行動が変容していった。

5.3.3　社会性、他者理解

●（１日目）失敗することは怖いが、人には思い切って話しかけると、相手も話しかけてくれた。

●（３日目）自分と合わないと勝手に決めつけていた人と話してみると、意外と楽しく接することができた。

●（３日目）他人の意見を受容できた。

●（４日目）メンバーの考え方を知るにつれて、メンバーに対する印象が変わった。

●（５日目）プライベートでは仲良くなったりしないであろう人と、今回、いいところを認めることができた。

●（５日目）当たり前ではあるが、全員、一致団結することができた。

興味深いのは、日を追うごとに他者に対する認識が「近い人」になっていっていることがジャーナル上で読み取ることができることである。1日目では「思い切って」と緊張状

態であることが見受けられる。2日目は無いが3日目では、「決めつけていた人」は、実は「楽しく接する」ことができる人であったり、自分は相手の意見を「受容」できるようになっていたりと、「私」自身が他者に対するガードを下げ始めていることが分かる。4日目ではこれまで一緒に時間を過ごしてきたメンバーに対する印象が変わり、5日目で、プライベートでは仲良くなることはないだろう人のいいところを認めることができる、と述べている。そして最後には、「一致団結できた」とまで言っている。

日常生活への応用

経験を通した学びで大切なことは、日常生活以外の場所で学んだことを日常生活へ持ち帰り、それを活用していくことである。この非日常で経験した出来事や主観的な感情、感覚を客観化、一般化するのが「振り返り」である。それを日常生活へ持ち帰り、考え方や態度、行動が非日常を経験する前と比べて、変容していることが期待される。今回、そのことについて言及しているジャーナルがあったので、紹介する。

- （５日目）学んだことを忘れずに、千葉に持って帰る。
- （５日目）今回の経験を私生活にどのように活かすかを考え、忘れないようにすることが必要。
- （５日目）今回、見たこと、感じたことを忘れないで、これからの生活に活かしていきたい。
- （５日目）プロジェクト全体を通して学んだことを今後活かせるようにする。
- （５日目）経験を今後にいかすためには、振り返りが重要だと感じた。

全体を概観すると、日を追うごとに個々人の態度が変容し、積極性とそれに伴って社会性が向上していった。グループとして成立していく過程が見られる。このプロセスはTuckmanのチーム発展のプロセスと一致する。

笑顔になろうプロジェクトは、東日本大震災の支援プログラムとして開始したが、その位置づけは継続しつつ、地域振興プログラム、大学生の教育プログラムという側面も持つ、経験的教育プログラムでもある。

分析対象となった2017年8月、及び2018年3月の「笑顔になろうプロジェクト」の報告書は、当時の企画実施責任担当の大学生が作成した。ご希望の方は、nakayamak@kumaproject.jp までご連絡頂きたい。

ボランティア活動　日誌

開始：　　時　　分、　終了：　　時　　分。　本日の算入対象活動時間＿＿＿＿＿時間

学科		日付	年　　月　　日（　　日目）
学籍番号		かな	
ニックネーム		名前	

活動内容：

本日の達成度、満足度　　％　何がどうなれば、どうしていれば、100%になりましたか。（初日は記入不要）

最も印象に残っていること、及びその理由：

今日、学んだこと／感じたこと：

今日、自分で自分をほめることができること、及びその理由：

※　裏面にも記入のこと　※

今日気付いた自分の強み。具体的な場面、具体的な言動:

次回(明日 or 今後 or 日常生活)で気をつけること、または自分自身の課題、それを克服するために必要なこと:

疑問に思ったこと／分からなかったこと／聞きたかったけど聞けなかったこと

【取扱注意】差別的な言動を受けたり、不快な思いをしたり、イヤな感じを受けたことがありましたか。具体例とともに示してください。

自分自身や他の人にとって、より良い経験になるような提案、意見がありますか。

明日のテーマ、及びその理由:

昨日から自分の中で何か変化がありましたか。もしあれば、なにがどうなりましたか。(最終日は企画前と比較して)